福祉の世界にとびこんだ私の履歴書――社会福祉経営全国会議

6 振り返れば行きがかりでやってきた私

佐藤 匡子（社会福祉法人たんぽぽ会理事長）

K君への支援をきっかけに部落問題研究の道へ◆

私が物心ついた頃からよく、福祉事務所の人が自宅に来ていました（昭和三〇年前後）。年に一度か二度、肢体不自由児であった兄の慰安旅行のご案内でした。それに対して母は「ありがたいお話と思わなくてはいけないのでしょうが、そういう上からの恩賜的な態度のご案内よりも、実現してほしいことがたくさんあります。国鉄の介護者付きの申請書類の簡素化をはじめ、めんどうくさい手続きがあります」などと、福祉への要求を直に突き付けていました。

その兄が高校時代に創立した「社会科学研究クラブ」に、一つ下の私も入りました。その年に京都銀行の入社試験を受けたK君が身元調査で落とされたことをきっかけに高校生が声を上げ、平和憲法記念京都高校生春期討論集会が綾部高校で開かれたのでした。兄たちは生徒会あげてK君を支援し、校長も部落差別があったことをしぶしぶ認めました。その年（一九六三年）に部落研がサークルとして設立され、その経過は『友情と連帯の記録――綾部高校部落研の歩み』（汐文社、一九六五年）として出版されました。そのことがきっかけで、府立高校同研の石田真一先生の強い推薦により、私は一九六五年、社団法人部落問題研究所に職員として就職しました。

朝田派から部落問題研究所の活動への妨害 …◆

一九六五年は部落問題にとって激動の年でした。「同和対策審議会」の答申を踏み絵にして解放同盟朝田派が運動を分裂させていったのです。部落問題研究所は民間の学術研究機関として先人達の私利私欲のない努力で高い評価を受け、一九六六年一月三日の朝日新聞紙上で「朝日賞」の受賞の発表があり、一九七二年の水平社創立五〇年を記念して『水平運動史の研究』を出版し、これは毎日出版文化賞を受けたのでした。運動団体ではないのに、解同朝田派からの研究活動への妨害はすさまじいものでした。

私たち夫婦は「部落問題を語る会」で知り合い、一九七三年に結婚しました。彼は一九七二年に弁護士として正森成二法律事務所に在籍していました。解同の窓口一本化の裁判の原告弁護団事務局長をしていて、夫婦ともに多忙な毎日でしたが、若くて元気でした。一九八〇年に連れ合いが郷里の山形での開業を希望し、私も心残りがありながらも山形に行くことにしました。

山形で出会った保育実践と運動 ……◆

山形に来てはじめて出会ったのが、保育所づくりでした。当時、ベビーホームでの死亡事故が大きな社会問題でした。山形市では産休あけ長時間保育がなされておらず、保育内容も劣悪でした。切実な要求をもった働く女性が集まり、無認可保育所をつくり、認可運動として発展していきました。

当法人は今から三二年前に認可され、今では三つの保育所を運営しています。私がこの運動の中心となりえた力は、大阪の保育運動から学んだことが土台となっています。子育てのことは保育士さんに助けられ、「親」となることができたのです。今では次の世代も育ってきており、いつでもバトンタッチできる状況です。一方、保育所が軌道に乗ったら、今度は高齢者問題に直面しました。特養ホームづくりのなかで、私の母と連れ合いの母を見送り、その過程で高齢期運動にも打ち込んでいます。高齢者施設を支える地域ボランティアの責任者として楽しくやっていますが、私も半年後には後期高齢者です。

昨年秋に夫を亡くした悲しい出来事があり、今でも完全には元気ではありません。しかし、今まで出会えた人々に支えられ、今も多忙な毎日を過ごしています。

私の歴史はつまるところ机上の出発ではなく、行きがかり上ぶつかったことを、その時々に真剣にこなしてきたということでしょう。まさに出会いはドラマです。